Takashima Toujyu Kai 会報

No. 26
2021.5.18

高島藤樹会

（題字は、竹脇曇卿先生によるものです）

発　行
NPO法人　高島藤樹会
〒520-1224
滋賀県高島市安曇川町上小川225-1
藤樹書院・良知館内
電話・FAX　0740（32）4156

「致良知」の一考察

賛助会員　戸次　威左武

一、中江藤樹先生の「致良知」とは

「人は、だれでも『良知』という美しい心をもって生まれています。ところが、人々は、次第にみにくいいろいろな欲望が起きて、つい良知をくもらせてしまいます。私たちは自分のみにくい欲望に打ち克って、良知を鏡のようにみがき、その良知に従い、行いを正しくするよう日々努力することが大切です。」という教えです。

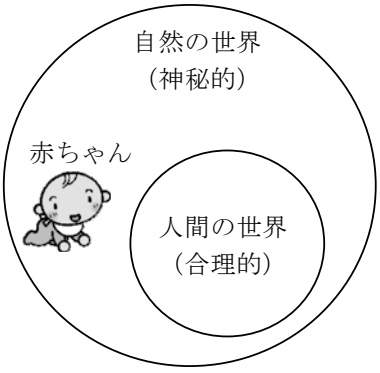
生まれた時の赤ちゃんは純粋です。孫はかわいいし、歌舞伎や能の舞台で子役が出てまいりますと、その舞台の雰囲気ががらりと変わって、子供の魅力にみんな引き付けられます。その魅力が「良知」だと思います。



二、人間と自然

人間の作った物はほとんど直線でできています。机、家、ビルディングなど、少し曲線がありますが、それは円か単純な曲線で直線がほとんどです。

それに対して、自然界の物は複雑な曲線です。花、木、山、動物、人間など、どれを見ても曲線です。その能力を考えてみますと、人間の能力よりも、自然の能力の方がずっと大きいと思います。



人間と自然の関係を図に表しますと右のようになるのではないでしょうか。自然の曲線の世界は広くて、その中に人間の世界があります。

人間の考えは合理的です。数字は人間が作った物です。物の価値も人間が作った物です。すべて合理的です。直線的です。合理的の反対は、神秘的だと思います。神秘的とは「人知ではかり知れない不思議なこと」です。曲線の自然の世界は人間の頭では理解できない世界です。

三、赤ちゃんと自然と人間社会

赤ちゃんは、人間という自然から生まれたものです。神秘的です。自然の曲線の世界から生まれたものです。その赤ちゃんは「良知」という美しい心をもって生まれていると中江藤樹先生は言っておられます。性善説です。

自然から生まれた赤ちゃんは、人間社会で生活するため、人間社会のルールを親から学び、高度な知識は学校で習います。学校で学ぶことはテスト重視の教育ですから、人間の頭で答の出ることを学びます。ほとんどが直線的であり、合理的です。そして社会の荒波に翻弄されて生きていきます。赤ちゃんの「良知」を鏡にたとえますと、直線的な人間社会でいろいろなことを教わって生きていくにつれて、その鏡を曇らせてしまうと中江藤樹先生は言っておられます。生まれながらにして持っている「良知」をなるべく曇らせないようにする努力が必要だと教えていただいています。

四、幼児教育の大切さ

このように考えますと、学校へ行く前の幼児教育が重要であります。曇らない強固な鏡が必要です。親が生活の基礎、常識をしっかりと教える必要があります。

それが中江藤樹先生が言われます「良知に到る」「致良知」だと思います。

現在の社会にも通ずる正しい大切な教えであります。

ひじりの声　上田　藤市郎

インターネットの普及によって世界の様々な情報が短時間のうちに、しかも比較的容易に、多数の人々のもとに届くようになった。その結果、私たちは、インターネット、テレビ、ラジオ、新聞など、どのメディアを選んでも、ほぼ同じ情報を得ることになっていて、これらの話題を共有することで周囲の人々と交流している。

ふと、我に返って考えてみると自分独自の気持ちや体験を日々の生活の材料にして、物事を考えたり、相手に伝えたりする活動が減っているように思える。メディアの話題が自分の思考に深く侵入してきているのである。

例えば、人の命はもっと大切にされなければいけないのに、銃で殺される人々があまりにも多過ぎる。お金や食べ物がなかったら、助けてもらえる社会だといいのに、死を選ばざるをえないところまで追い込まれる個人や家族がいるのは、本当に悲しいことだ。政府の方針に反対すると逮捕される国がいくつもあるのも納得がいかない。

メディアの情報で自分の頭をいっぱいにせず、じっくりと自分でいのちや生活、人々の苦しみや痛みを感じ取り、自分自身の気持ちを大切にして、発言し行動することが大事だと思う。

高島藤樹会の活動

藤樹人間学塾…藤樹思想を学び考え実践する

塾長　田中　清行

「藤樹人間学塾」では、藤樹先生の著書を中心に思想を学ぶとともに、時事問題と組み合わせて皆で議論しながら考えを深め、日々の生活の場で実践することを目的に毎月開催しています。本稿ではその模様をお伝えいたします。

一月はコロナの感染が広がっていたのでお休みにし、二月六日（土）午後、安曇川公民館で第百十二回の塾を開きました。参加者は九人でした。

今回は『中庸解』第二十二章です。「ただ天下の至誠のみ、よくその性を尽くすことをなす。・・・即ちもって天地と参すべし」です。

大意について次の様に説明しました。「ただ天下において至誠の人である聖人にして、よく自分に賦与された天命の性を察し細大漏らさず尽くすことができる。よくその天命の性を尽くせば、よく他人の性も尽くすことができる。よく他人の性も尽くすことができれば、よく自他万物一切の性を尽くすことができる。よく自他万物の性を尽くすことができれば、天地自然が万物を育てることを進めることができる。万物を育てることを進めることができれば、天地と肩を並べて合一となる」。この節は、聖人の高い境涯を経文にしたがって藤樹先生が解明しておらます。

私たちが日常生活において直面する課題を解決するためには、出口治明『自分の頭で考える　日本の論点』を紹介し、タテ（歴史はどうか）、ヨコ（世界ではどうなっているか）、算数（論理）の考え方や事例が大変参考になると述べました。

また、「日経ビジネス」に掲載されたジャック・アタリ氏「次世代の幸せを考えよう」を紹介し、現在の民主主義は危機を迎えている。個人自由を強く掲げた民主主義、行き過ぎた市場中心主義から、他者のこと、次世代のことを考えた民主主義そしてマネーより生命を大切にする経済（①少肉多菜、②少糖多果、③地産地消、④食育と節食）に変えなければならないという意見に賛同すると述べました。

参加者からは「人の性、物の性を尽くすためには修業が必要だと思った」、「物事を判断するにタテ、ヨコの情報を努力して集め、主体的に考えることが重要だと思った」、「今まさに直面している課題のヒントを得られた」、「少肉多菜について、不二製油の〝大豆は地球を救う〟は、近江商人の〝三方よし〟が基で良かった」等の意見、感想をいただきました。

三月は「藤樹・心のセミナー」を予定していたのでお休みにし、四月三日（土）午後、安曇川公民館で第百十三回の塾を開きました。参加者は十人でした。

今回は『中庸解』第二十三章です。「その次は曲に致る。曲なればよく誠あり。誠あれば即ちあらわれ・・・・変ずれば即ち化す。唯天下の至誠のみ。よく化することをなす」です。

大意について次の様に説明しました。「前回は聖人の誠だったが今回は賢人以下の人の誠。凡夫であっても元来は心に誠が有る。その誠があれば努力すれば表れてく





る。さらに努力すればそれが顕著になる。さらに努力すれば欲などの惑いが取れる。さらに努力すれば惑いに阻害されなくなる。さらに努力すれば凡心から聖（きよ）い心に変わる。さらに努力すれば物など相手と我との隔たりがなくなり一体化する。そうなれば聖人の域に達するのである」。この章は、凡人でも努力次第で聖人の高い境地に達することを藤樹先生が解明しておらます。

では、凡人はどういう努力をすればよいのでしょうか。そこで「致知今年二月号」の「東洋教学が導いてくれた世界」を配りました。その中でリンカーンの「志あるところに道は開く」という言葉、渋沢栄一の「自分は『論語』だけで経営をやってきた」との言葉などを紹介しました。すなわち、自分はこういう方向で社会に貢献するという大きな志を持って努力することだと思います。

参加者からは「いびつな経済と健全な経済をしっかり認識して健全な経済のために今日学んだことを生かしていきたい」、「他人のことを我がことのように考える人がいるのは凄い」、「フリートーキングでの皆の意見がとても参考になる」等の意見、感想をいただきました。

私からは「利益が上がらないと幸福になり難いが、利益を多く得たからといって幸福になるわけではない。他の幸福を願う心や徳を積んではじめて幸福になると思う」と述べました。

人間学に関心のある方は是非お越しください。心からお待ちしています。

藤樹人間学塾　今後の予定

六月五日（土）、七月三日（土）
八月八日（日）、九月十八日（土）
■日時　（原則）十五時～十七時
■場所　（原則）安曇川公民館

「藤樹紙芝居」の紹介⑱

「藤樹紙芝居」の紹介も、今回が最終となりました。特に、今の若い人たちに是非目を通していただきたい作品です。

『脱藩の道』

（解説）

与右衛門さん（藤樹先生）は、数え年九歳で小川村から祖父に伴い、米子、大洲に行き、侍の子として育てられました。しかし、十四歳の時、祖母を、その翌年には祖父を相次いで亡くしました。三年後の十八歳の時には、ふるさとの父吉次の死を知らされました。父とは、小川村を出て以来、一度も会うことなく、永遠の別れをしたのです。

自身の悲しさはさておき、心を痛めたのは、母のことでした。頼りにしていた夫を亡くし、寂しく暮らす母が心配でした。

そこで、小川村に帰って母を養おうと考えて、藩主に辞職を申し出ましたが、与右衛門さんの人徳、学徳を惜しむあまり、数年が過ぎてもお許しが出ませんでした。与右衛門さんは、悩み苦しむ中で、ついに死罪を覚悟して脱藩を決断、実行しました。与右衛門さんの意志の強さ、母を思う一途さに心打たれる実話です。

与右衛門さんの生き方に関する話として、多くの人々に語り継ぎたいと考えて制作しました。藤樹先生の講話として、また道徳の時間の資料（家族愛）として、活用していただくことを願っています。

▼参考文献
・児童用副読本『藤樹先生』
（編集・発行：高島市教育委員会）



（紙芝居）

①　与右衛門さんが十八歳の時、小川村のお父さんが亡くなりました。九歳で米子へ旅立った時から、一度も会うことがなく、父を亡くしたのです。



与右衛門「おばあさん、おじいさんに続いて、お父さんも亡くなられた。一度でいいから会いたかった。お父さんと力を合わせて家を守ってこられたお母さんは、心細くしておられることだろう。お母さんのことが心配だ。小川村に帰りたい。」

②　十九歳で郡奉行という大切な仕事をしていた与右衛門さんは、お父さんの墓参りにも行けない忙しさでした。

そして、お父さんを亡くしてから、四年の月日がたちました。ようやく殿様のお許しが出て小川村のお父さんのお墓参りと、さびしく暮らすお母さんに会うため、ふるさとに帰ることができました。

与右衛門「なつかしいわが家だ。ああ、垣根がいたんでいる。植木もよくのびているな。お母さんは困っておられるのだ。心配していたとおりだ。」

父を亡くしたわが家は、荒れ果てていました。お父さんの墓は、屋敷の中にありました。（その当時は、家の庭にお墓をたてました。）お墓

のまわりは、きれいに草が取ってありました。与右衛門さんは、さっそく、お墓の前にひざまづきました。

与右衛門「お父さん、遅くなりました。九歳でお別れをしてから、一度も会うことなく過ごしました私の親不孝を、どうかお許しください。」

与右衛門さんは、お父さんのお墓に手を合わせ、一心にお参りをしました。

③　与右衛門さんは、家の表戸の方に回って、ガラリと開けました。

与右衛門「お母さん、与右衛門が帰ってまいりました。今、お父さんの墓参りをさせていただきました。」



母「まあ、与右衛門ですか。何と立派なお侍になって。よく、お参りに来てくれましたね。お父さんもどんなにか喜んでおられることか。」

お母さんは、与右衛門さんの両手をにぎり、涙を流して喜びました。

与右衛門「お母さん、お父さんが亡くなられてからは、さびしい暮らしをしておられることでしょう。ところで、妹の葉（よう）は、出かけているのですか。」

母「ああ、葉は今、用事で出かけていますよ。そうそう、葉にめでたいことがあります。近々、隣村の小島家に嫁入りすることになりました。」

与右衛門「ほう、それはめでたいことだ。しかし、葉が嫁ぐことになると、いよいよお母さんは、ひとりぼっちになりますね。さびしくなりますよ。どうしたらいいものだろう。」

母「私のことは心配しなさるな。年はとりましたが、今のところは健康だし、葉は、嫁ぐとはいっても、近くの村なので何も心配はいりませんよ。」

お母さんは、笑いながら答えました。おひまをもらって過ごした小川村の数日間は、あっという間に過ぎました。与右衛門さんは、母と妹のことを気にかけながら、小川村から大洲へと出発しました。

④　大洲に戻った与右衛門さんは、お母さんのことばかりが気にかかりました。

与右衛門「葉が嫁ぐと、お母さんはさびしいひとり暮らしになられる。病気になっても、看病してくれる人もいない。どうすればよいのか。」

与右衛門さんは、よい方法はないものかと、毎日のように考えていました。すると、よい考えが浮かびました。

与右衛門「そうだ。この大洲は近江と違って、冬も暖かく暮らしやすい。お母さんに大洲に来てもらい、一緒に暮らそう。そうすれば、私も安心だ。できるだけ早く、お母さんを迎えに行こう。」



与右衛門さんは、考えが決まると気分が落ち着き、お母さんを迎えに行く機会を待ちました。

⑤　与右衛門さんが二十五歳になった時、ようやく殿様からおひまがもらえました。

与右衛門「ありがたい。小川村に行ける。早くお母さんを迎えに行かなくては。」



飛ぶような気持で、再びお母さんを迎えに小川村に帰ってきました。妹の葉が嫁いでから、お母さんはひとりで暮らしています。

与右衛門「ずいぶん、屋敷が傷んでいるな。お母さんは苦労をしておられる。心配していたとおりだ。」

ふるさとのわが家は、三年前より荒れて、ひとり暮らしの家だと分かる様子になっていました。表戸をガタガタと開けると、お母さんは粗末な昼ご飯を食べていました。暗い家の中に、急に明るい光が差しこんできたので、お母さんはおどろいて戸口を見つめました。

与右衛門「ただいま。お母さん、びっくりされたことでしょう。与右衛門です。」

母「まあ、与右衛門ですか。おどろきましたよ。さあ、お上がりなさい。」

思いがけず、息子が帰ってきたので、お母さんは大喜びです。

⑥　与右衛門さんは部屋に入るやいなや、すぐに話を始めました。

与右衛門「お母さん、ようやくお迎えにまいりました。お墓参りに来た時から、早、三年も過ぎましたが、これからは、大洲でお母さんといっしょに暮らすことができるようになりますよ。」



母「それは、どういうことですか。」

与右衛門「私は、お母さんといっしょに大洲で暮らすため、殿様におひまをお願いして、ようやくお迎えに来たのです。」

母「えっ、この私が大洲に行くのですか。」

与右衛門「そうです。お母さん、喜んでください。これからは私といっしょに安心して暮らせます。お母さん、私と大洲へ行きましょう。」

お母さんは、与右衛門さんの話を聞いて、じっと考えこみました。与右衛門さんのやさしい気持ちに心を打たれました。しかし、思いがけないことを言いました。

母「お前の気持ちは、涙が出るほどうれしく思います。しかし、私は小川村を出たことがなく、知らない土地で暮らすことは、とても不安です。その上、船酔いがひどいので、遠い大洲まで船旅をすることができません。私はこのままずっと、この小川村で暮らしていきたいと思います。与右衛門、どうか、年寄りのわがままと思って、許しておくれ。」

与右衛門「お母さんといっしょに暮らしたいという、私の願いを聞いてください。」

母「私のことは心配しないでおくれ。おまえのやさしい気持ちをはげみにして、元気に暮らしますよ。」

お母さんの気持を聞いた与右衛門さんは、困り果てました。

与右衛門「殿様に仕える身では、この小川村にいようともしても許されない。しかし、お母さんを残して大洲にもどれば、親孝行ができない、困ったことだ。」

⑦ 与右衛門さんは、暗くしずんだ心で、すごすごと大洲に帰ることになりました。

与右衛門「私の気持ちが分かってもらえたら、いっしょに大洲で暮らせると思ったのに。お母さんは、一生ひとりで暮らすことになってしまう。」

帰りの船の中でも、お母さんのことばかりを考えていました。



しばらくしてからのことです。突然、はげしい咳が出て、止まらなくなりました。

与右衛門「コンコン。ゴホン、ゴホン。」

与右衛門さんは、咳をしているうちにのどがゼーゼーとなり出し、息が止まるかと思うほどの苦しみでした。

船の客「おさむらいさん、喘息の発作のようだね。時々起こるのかい。」

与右衛門「いえいえ、こんなことは初めてです。コンコン。」

幸い、周りにいた人達から、親切にしてもらい、何とか発作も治まりました。ようやく、大洲の港に帰り着くことができました。

与右衛門「皆さんのおかげで、命拾いができました。ありがとうございました。」

船の客「苦しそうだったけれど、治まってよかった。しばらくは気をつけな。」

与右衛門さんは、船のお客たちに深々と頭を下げ、家にもどりました。

しかし、この時から、与右衛門さんの喘息は持病になり、たびたび発作を起こすようになりました。

⑧ **〈半分まで、引く〉**

与右衛門さんの弱った体は、数日寝込むと何とか治りましたが、お母さんのことで悩む日が多くなりました。

与右衛門「お母さんの年になると、急に見知らぬ土地で暮らすのは大変かも知れない。それに船旅に弱いのも本当だ。しかし、どうすればいいのだろう。」

与右衛門さんは、毎日、毎日、考えているうちに、こんなことを思いつきました。

与右衛門「そうだ。この私が殿様におひまをもらって、小川村に帰ればいいのだ。」

この考えが決まると、ようやく、与右衛門さんはぐっすりと眠れるようになりました。



〈全部ぬく〉

数日後、家老の家に行きました。

家老「中江殿、どうぞお上がりなさい。どんなご用ですか。」

与右衛門「近江の国に、年老いた母が一人暮らしをしております。大洲へ連れてくるつもりでしたが、いろいろな事情がありまして、無理でした。母の世話をするため、私におひまをいただけるよう、お殿様にお願いをしていただきたいのです。」

家老「そうでしたか。親思いの中江殿の気持を殿様に申し上げ、お許しをいただけるよう、お願いしてみましょう。」

家老は、快く引き受けましたが、心の中で与右衛門さんの人柄や、すぐれた学問の力を大洲で生かしてほしいと考えていました。そこで、殿様には、伝えませんでした。

⑨ **〈場面の三分の二まで引く〉**

与右衛門さんは、お許しが出るの



を今か今かと待ちました。何度も家老の屋敷にたずねに行きましたが、いっこうによい返事がもらえません。

与右衛門「ご家老様、殿様のお許しはまだいただけないのでしょうか。」

その後も、与右衛門さんが熱心に足を運んだので、「与右衛門さんを近江に帰したくない」と思っていた家老も、とうとうあきらめました。そこで、与右衛門さんに言いました。

家老「中江殿、お殿様のところへあなたの手紙を持ってお願いに行くことにする。お母さんのために仕事をやめたいという辞職の願いを書いて、私のところに持ってきなさい。」

与右衛門「ご家老様、ありがとうございます。さっそく書いてまいります。」

〈ここで、全部引く〉

与右衛門さんは、必死の願いを込めて家老に辞職の願いを書きました。一つは、自分が喘息にかかり、人並みの仕事ができなくて困っていること、また、一つは、ふるさとの母が年老いた体で、一人さびしく暮らしていることを書きました。母が亡くなったら再び大洲に帰って、殿様にお仕えしたいこと、そして、他の藩に移って立身出世したいという気持は決してないことなどを、真心込めて書きました。

⑩ 与右衛門さんが小川村に帰る決心をし、辞職のお許しを願い出てから、早くも二年半の年月が過ぎました。しかし、とうとうお許しの返事はなく、ふるさとへ帰る見通しはたちません。



与右衛門「ああ、殿様はいつお返事をくださるのだろうか。お母さんのことを考えると、本当に心配だ。」

年月がたって、お母さんにもしものことがあっては大変です。

与右衛門「よし、この上は、殿様のお許しがなくても、思い切って小川村へ帰ろう。今は、この方法しかない。」

許しをもらわないで藩を出ることを「脱藩」といって、追っ手に討ち取られるか、とらえられて切腹を命じられるのが、その時代のきびしい決まりでした。しかし、与右衛門さんは、小川村に帰ろうと心に決めたら、もう、何の迷いもありませんでした。

⑪ 与右衛門さんは、その年にお殿様からいただいたお米には一粒も手を付けず、全部倉の中に積んで堅く封をし（手を付けていないことを示す方法）、そのまま殿様に返せるようにしました。

七助「だんな様、どうしてそのように封をして、倉から米を出せないようになさるのですか。」

与右衛門「七助さん、お前さんだけには、ぜひ話したいと思っていた。これまで、何も言わずにいて、すまなかったな。」



七助さんは祖父の時代から家の力仕事、水くみ、掃除、炊事など一手に引き受けて、誠実に働いてくれた男の使用人です。

与右衛門「お前さんも知っているように、私には、近江の小川村に年老いた母が一人暮らしをしているので、数年前から殿様におひまをいただけるようお願いをしてきた。しかし、未だにお許しがいただけないのだ。この上は、脱藩しか方法がないと思い、近々実行することにした。できるだけ、迷惑をかけないようにと考えて、準備をしているのだよ。」

七助「だんな様は、前々から何か悩んでおられると思っていました。やはり、そうでしたか。よく分かりました。お手伝いできることなら、私に何でも言いつけてください。」

⑫ 大洲の山々は、美しく色付き始めました。与右衛門さんは親しい人の見送りも断って、門弟の一人だけに、港まで送ってもらいました。七助さんが、



「どうしてもお供がしたい」と言うので、やむを得ず小川村までついてきてもらうことになりました。

七助「だんな様、こうして船から眺める大洲は、特別に美しいものですね。」

与右衛門「本当だ。私も、『こんな良いところに、長い間住んでいたのだなあ。』と、しみじみ考えていたところだよ。」

そして、与右衛門さんは、「この美しい四国の山々を再び見ることはないかもしれない」と思うと、胸がいっぱいになりました。

瀬戸内海から、淀川、宇治川を上って、大津へともどって来ました。最後に琵琶湖の旅をして、小川村の土を踏んだのは、約半月後でした。

⑬与右衛門「お母さん、与右衛門は、今度こそ本当にもどってきました。」

母「与右衛門、信じてよいのですか。」

与右衛門「これからは、私はお母さんといっしょに暮らせることになりました。」

母「与右衛門、こんなにうれしい日が来ようとは。」



お母さんは、感激のあまり涙がはらはらと流れて、続く言葉も出ません。細い両腕が与右衛門さんを抱きしめました。与右衛門さんの両目から、涙があふれて止まりませんでした。この時、与右衛門さんは二十七歳、お母さんの市（いち）さんは五十七歳になっていました。

与右衛門さんは、まもなく京都の友人の家に行き、大洲の家老に手紙を書きました。お許しをもらわないで、近江にもどったおわびと、どのようなおとがめにも従う覚悟であるということを書いて、出しました。しかし、殿様は、脱藩の事情がよく分かっていたので、追っ手を出すことはありませんでした。与右衛門さんは、安心して小川村へ帰りました。

命を懸けて小川村に帰った与右衛門さんは、ようやく母のそばで、のびのびとした生活ができることを幸せに思いました。

（おしまい）

藤樹記念館通信 ⑪

『日中友好交流のシンボル 中江藤樹記念館北側に位置する【陽明園】』

理事　**武田　基裕**

皆さんは、『近江聖人中江藤樹記念館』の北側に隣接する全国的にも珍しい中国式庭園の〈陽明園〉をご存じでしょうか。あの朱色のどこか中国様式の立派な建物であった〈陽明亭〉が池の中ほどにたたずんでいた庭園です。この〈陽明亭〉は、老朽化による倒壊の危険があったため平成三十一年一月に解体しましたが、陽明園には市内外からたくさんの方が訪れ、あたたかな陽光のもと、池の鯉に餌を与えたり、写真を撮られたり、お弁当を食べたりしながらゆったりとした時の流れを楽しんでおられます。



知人や友人たち、訪問される方々とお話ししていてよく話題になるのは、「この〈陽明園〉って中江藤樹記念館の施設の一部やったん？知らなかった。全く別の施設の庭やと思っていたわ。」ということです。恥ずかしながら、私自身も実はつい数年前まで中江藤樹記念館と〈陽明園〉は隣接していることは知ってはいましたが、記念館の施設の一部であることを知らなかった一人です。この機会に〈陽明園〉の概要を少し知っていただき、お天気の良い日等に是非とも訪問いただき、中国文化の一端にふれていただければ幸いです。心からお待ちしています。なお、〈陽明園〉の入園料はいただいておりませんことも併せてお知らせします。

以下、本館リーフレットから〈陽明園〉の概要を抜粋し、紹介します。

【陽明園】

昭和六十一年からはじまった王陽明（1472–1528【明代】）の生誕地である中国浙江省余姚市と、日本陽明学の祖・中江藤樹（1608–1648）生誕の地である滋賀県高島郡安曇川町（平成の市町村合併前）の友好交流シンボルとして建設された中国式庭園です。設計に際しては上海の豫園、蘇州の拙政園や留園など、中国における代表的庭園を参考にしました。「太湖石」と呼ばれる池の周囲などに配した奇怪な形をした岩石や塀の「龍瓦」をはじめ、陽明園に用いられている建築材料のほとんどは、中国から輸入したものばかりです。

工事が着工されたのは平成三年十二月十八日、竣工は翌平成四年九月三十日、そして開園されたのはその年の十月二日でした。総敷地面積は千八百㎡、総事業費は二億四千万円の大きな規模の工事でした。

【陽明亭】

八角平面の二層式あずまやの〈陽明亭〉は、儒学者である中国明代の哲学者、王陽明が講学した中天閣に残されている建物にならって建築されましたが、この〈陽明亭〉は、中国浙江省余姚市文物管理委員会の時代考証を経て五百年前の建築様式に基づき、余姚市城郷建設委員会の監修によって復元されたものです。



※紹介しました通り現在は解体しましたので建屋はありません。土台の跡は残っています。建屋の概要は木造二層式平屋建（八角平面）床面積十九㎡、高さ六・八ｍでした。

【王陽明石像】

陽明園を西端から園全体を見つめるように建っている、皇帝に拝謁する時の姿を描いた等身大の王陽明石像は、余姚市に古くから伝わっている王陽明の画像にもとづき、余姚産の花崗岩を使用して制作されたものです。像の頬の部分がこけていることから、王陽明が三十歳前後の頃から肺病を患っていたことが伝わってきます。

中江藤樹記念館、陽明園とも、市外、県外の方はたくさん訪問されますが、近くにあるにも関わらず（いつでも訪問できるというのもあるのでしょうが…）市民の方の利用が少ないので、職員一同創意を重ね、市民の方々にも「来てみてよかった。」、「藤樹さんのこと、よく勉強できたわ。」と言っていただけるような施設に発展させていく所存です。皆さんのご訪問を心からお待ちしております。



中江藤樹記念館

●入館料　高校生以上　三百円
　小中学生、乳幼児無料

●休館日　月曜日〈祝日を除く〉、祝日の翌日〈土日祝日の場合は開館〉、年末年始

陽明園　無料

賛助会員一覧

★新規賛助会員のご紹介

令和三年四月末日までに、本会にご加入いただきました賛助会員をご紹介します。ご加入ありがとうございます。

○戸次会計事務所
（高島市安曇川町中央）

★既加入の賛助会員一覧

ご協力ありがとうございます。

○ウェストレイクホテル可以登楼
○税理士法人 淡海総合会計
○大津公証人会　白髭博文
○大溝工業 株式会社
○株式会社 大山建設
○岡本アルミ建材 株式会社
○川島酒造 株式会社
○川島織布 株式会社
○株式会社 Ｇｒｏｗ－Ｓ
○株式会社 桑原組
○有限会社 宏和商事
○税理士法人 小畑会計事務所
○佐治タイル 株式会社
○株式会社 澤村
○株式会社 シグマックス
○有限会社 白浜荘
○新旭電子工業 株式会社
○杉橋建設 株式会社
○ソエダ 株式会社
○高島鉱建 株式会社
○田中マネジメント事務所
○株式会社 ＴＡＤコーポレーション
○鉄屋商事 株式会社
○寺子屋まなざし童心塾
○有限会社 天平フーズ
○株式会社 戸井薬局
○とも栄 藤樹街道本店
○ナカショウ 株式会社
○株式会社 中田運送
○中村印刷 株式会社
○株式会社 中村測量設計
○ニッケイ工業 株式会社
○有限会社 馬場塗装
○株式会社 ホリゾン
○株式会社 ヨシダヤ
○有限会社 綿庄食品店

（五十音順）